

現代ロシアにおける愛国主義：プーチン政権による 国民統合政策の分析

西山, 美久

<https://hdl.handle.net/2324/1654605>

出版情報：Kyushu University, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	西山 美久			
論文名	現代ロシアにおける愛国主義 —プーチン政権による国民統合政策の分析			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松井 康浩
	副査	九州大学	教授	大河原 伸夫
	副査	九州大学	教授	岡崎 晴輝
	副査	九州大学	准教授	山尾 大
	副査	西南学院大学	教授	上垣 彰

論文審査の結果の要旨

本論文は、ソ連崩壊後のロシア、とりわけプーチン政権期に焦点を当て、国民的アイデンティティの再構築を目的に取り組みられたプーチン政権の「愛国主義」政策の形成とその展開過程を分析することで、現代ロシア愛国主義の特徴を浮き彫りにしている。特に、「愛国」の争点にかかわって、上からの権威主義的支配が指摘されるロシアの政治過程を地方や下からの動向を交えて描き出した点、愛国主義政策の対象として政権が青年層にとりわけ注目し、官制青年組織の組織化を通じて若者の掌握をはかった点などに詳細な分析を加え、現代ロシア政治・社会を理解するための重要な示唆を与えている。

本論文は二部構成をとり、序章と終章を除く全7章から構成されている。序章では、ロシアの新たなアイデンティティ構築を目指す政治エリートや知識人の動き、及び愛国主義政策が登場する背景を整理するとともに、先行研究の検討を通じて、本論文の課題が明示されている。

続く第1部（第1章から第4章）では、いかなるプロセスで愛国主義政策が策定され、それに基づく国民統合が模索されたのかを検討し、政策形成・展開のダイナミズム、すなわち「ロシア国民意識」創出の政治過程を明らかにしている。まず第1章では、ソ連崩壊後のロシアにおける愛国の実情を整理し、独ソ戦に代表されるソヴィエト期の偉業を讃える政策を通じて、愛国の制度化を図るプーチン政権の試みを描写している。第2章では、前章の検討を踏まえつつ、中央の動きだけではなく、愛国の制度化を求める地方からのイニシアティブにも着目し、地方が連邦中央の進める愛国主義政策の策定過程で様々な働きかけを展開していたことが明らかにされている。さらに第3章では、2005年に設けられた名誉称号「軍事栄光都市」の創設過程及びその付与の経緯を検討することで、現代ロシアにおける愛国を巡る多様な動きを浮き彫りにし、第一部を締めくくる第4章では、民族共和国タタルスタンに焦点を当て、愛国をめぐる中央地方関係のダイナミズムが分析されている。

第2部（第5章から第7章）では、国民統合を進める上で、とりわけ青年層の重要性に着目したプーチン政権の思惑を読み解きながら、青年組織の設立などにかかわる種々の政策を分析し、その青年層の統合の諸相を提示している。まず第5章では、政権が若者を焦点化した背景にあった「カラー革命」のインパクトに分析を加え、政策の変化を裏付け、第6章では、政権が若者の取り込みを図る目的で青年組織「ナース」の設立に着手し、ナースを通じた青年統合を試みたその実態を分析している。そして、第7章では、2007年の選挙に勝利することで「カラー革命」のロシアへの波及を封じたプーチン政権が、愛国主義政策をやや後退させたかのように先進諸国との競争を意識した「イノベーション」を新たな目的に掲げるようになり、青年組織ナースも、その政権の目的に

呼応した活動に軸足を移しつつも、初期の役割を終えて組織の解散へと導かれるその姿を描写している。

終章では、本論全体を見渡した上で、プーチン政権の愛国主義政策が有した特質を総括するとともに、残された課題や今後の展望に加え、ロシアの内政・外交といった現状分析へのインプリケーションについても言及して、本論文を締めくくっている。

最初にも簡単に触れたように、本論文の特色であり、学術的な貢献と考えられるのは主として次の二つである。第一に、愛国主義政策が連邦中央主導でトップダウン的に進められたのではなく、中央の動きに呼応し、あるいはそれを積極的に促すような地方や民族共和国からのイニシアティブが見られたことに光をあて、愛国主義政策の形成・展開をめぐるダイナミズムを明らかにしたことである。第二に、ロシア連邦政府が2001年に打ち出し、5年単位で3次（2001年～05年、06年～10年、11年～15年）にわたり改訂を重ねてきた「ロシア国民の愛国心教育に関する国家プログラム」を取り上げ、第1次から第2次に至る過程で、全国民を対象とした愛国主義政策が青年層を中心的ターゲットとしたそれへと変化したことに注意を向けたことである。その変化の背景には、2003年から04年にかけてグルジアやウクライナで生じたいわゆる「カラー革命」があり、青年層を中心に展開されたこの「革命」の影響がロシアにも及ぶことを恐れた政権は、青年層の愛国意識の涵養を重点課題に据えたのである。本論文は、2006年から始まった第2次「プログラム」に見られる変化に加え、政権が新たに官制青年組織「ナージ（我々）」の設置を通じて若者の取り込みを図った様相を、ナージの活動や動向をつぶさに分析することを通じて、詳細に明らかにしている。

以上のように、プーチン政権の愛国主義政策の形成と展開のプロセスを包括的かつ詳細に明らかにした本論文は、これまでの先行研究に照らしてもオリジナリティある重要な成果を示しており、博士（比較社会文化）の学位を授与するに値すると判断した。